

昭和六年の流行りもの

— ベビーゴルフ —

ベビーゴルフとは、トムサムゴルフ・ミニチュアゴルフなどとも呼ばれ、ゴルフ場を小さくして手軽にしたもので、後述のアメリカのベビーゴルフ場は、屋外では広くて一万坪、屋上・室内などにも設置された。

一九三一（昭和六）年の流行は、アメリカからやってきたが、アメリカでは、一九二六年頃、テネシー州のフェアリーランドホテルの経営者が設置した子供向けのコースから始まり、次第に大人もプレーするようになったという。また棉実殻をグリーンに入れる特許を取得して大々的に売り出した結果、二九年には全米各地にベビーゴルフ場が出来たという。この経営者は、「トムサムゴルフ」として特許を取得したが、全米への広がり如何ともし得なかつたという（西村貫一九三一年、ベビーゴルフ研究会一九三一年）。

一九三〇（昭和五）年一〇月に発行された『大横浜』第二七巻第六号では、米国雑誌の摘録として、アメリカで爆発的な流行となっている様子を紹介している。「米国では旋風の人氣を博し猫も杓子もそれに熱狂し、全米に三万のコースがあり、今も「雨後の筍のやうに」増加している。不景氣の時代に、これらのコースはどれも大繁盛なので、ビルの屋上、空き家、空き劇

場などちよつとした空き地があれば、たちまちゴルフコースに改造される有様だと書かれている。また、賭博の流行や夜間の騒音など社会問題を引き起こしたようである。この後、「英国にも渡つてこゝでもまた熱狂的流行を誇つて」、日本にも渡つてくることになる。

日本上陸

日本における最初のベビーゴルフ場は、一九三〇（昭和五）年一〇月、下羽寅吉が東京芝浦に開設した一八ホール、七〇坪ほどのコースだという（下羽寅吉一九三二年）。東京市では三一年三月後半には、二七箇所コースが出来ており（読売三・二三）、その後も増加したものとと思われる。

関西では、三〇年一二月、大阪市京町堀ビルディング屋上に開設されたものが最初といい、その後、大阪・神戸・京都などに多くのコースが開設された（ベビーゴルフ研究会一九三一年）。三一年一〇月、大阪朝日新聞の社屋として建設された朝日ビルでは、屋上が冬はスケートリンク、夏はベビーゴルフ場になると報じられている（大阪朝日一〇・二六）。

同年六月頃には、「東京市及び郊外を含めて六十余のベビーゴルフ場が経営されてゐる。横浜市や名古屋関西方面を入れると百四、五十箇所」くらいあつたという（商店界編集部一九三一年八月）。

また、「家庭でこゝへて遊びませう」と、廃材等を使って「近ごろ大流行のベビーゴルフ」を家庭で遊べるようにする製作記事（読売三・一一）や、家の中や庭で遊べるように障害物やボール・クラブがセットになった、二円三〇銭ぐらいの子供用の製品も出てきていた（朝日六・一四）。


このように、一九三一（昭和六）年には、大流行となつていた。

県内各地に設立

神奈川県内では、二月頃からベビーゴルフ場の名前が新聞に登場するようになる。最初は、横浜市の関内地区の記事となつてゐるが、後述することにして、先ず、県内各地に出来ていく様子を見ていこう。

二月二八日には、横須賀市の記念艦三笠の正門前埋立工事が五月頃に完成するので、三笠保存会ではベビーゴルフ場を作つて見学者を賑わす一策とすることになつたと報じている（横賀二・二八）。

横須賀市では、三月には、市議新野勇吉が若松海岸に計画していたベビーゴルフ場が竣工し、二九日に盛大な開場式を行う予定であると報じられ（横賀三・二六）、四月五日の記事では、観念寺海岸埋立地野球場の横に造られた同ベビーゴルフ場は、約二〇〇坪の広さのコースに、半島名勝三崎・城ヶ島・ペリリ記念碑・鎌倉の大仏・浪子



郊外散歩 好時季

當園は裏に入園料の大値下を致しました。御蔭様で好結果を得ました御禮を申し上げます。園中のベビーゴルフ室内野球乗馬ダンスは共に健康増進の遊戯であります。櫻雲臺の洋食部は破天荒の勉強振りで名物花月ランチ50ホツトケーキ紅茶付30は上流御家庭の御評判良好であります。御入園の際は是非御試食を願ひます。

東洋随一
子供パラタイス
花月園

花月園の広告（『横浜貿易新報』5月2日）

不動・追浜航空隊号が造られており、三月二九日に開場して少年や婦人を喜ばせていると報じられた（横賀）。四月三日には、「今三日開場の横須賀ベビーゴルフ場」の写真が掲載されており、着物姿の女性がプレーをしている様子とそれを見物している人々、後ろには燈台らしきものが写っている（横賀）。

このように新たに造られるものだけではなく、既存の施設でも取り入れられている。鶴見の花月園では、四月一日より「従来は子供の園として昼間のみ開園して居りましたが京浜間に大人の娯楽遊園が有りませぬ故午後六時より夜間を無料開放」として、玉突・ピンポン・ベビーゴルフ・活動写真・演芸館の施設を挙げて広告を出している（横賀三・一〇）。五月の「郊外散歩好時季」に出した広告（図参照）でも、「園中のベビーゴルフ。室内野球。

乗馬。ダンスは共に健康増進の遊戯であります」と宣伝をしている。同年発行の案内図によると、舟遊びができる池を挟んで、歌劇場の向かい側にベビーゴルフ場が記載されている（斎藤美枝二〇〇七年）。また、東京の例であるが、多摩川園が「安全なお花見」という広告の中で「ベビーゴルフ場・完成 独特のコースナル」と記している（横賀四・三）。このように、既存の遊園でも取り入れられていた。

夏には県内各地に海水浴場が開設されたが、そこでもベビーゴルフ場の名前があがっている。三浦郡逗子町では、五月一五日に逗子海岸の海水浴場更衣所、喫茶店、遊技場の設置出願を締め切ったが、一三五件の出願には、射的、撞球、半弓、球投げなどの遊技場の他に、新しい施設として、東京中野町の会社員が岸別荘下の海岸にベビーゴルフ場の設置を出願していると報じられた（横賀五・一六）。

湘南電鉄が設置する馬堀海水浴場（横須賀市）についても報じられている。六月一日、四〇〇坪の海の家を建設する予定で官有地使用について県から認可され、さらにその隣接した砂地一五〇坪の使用許可を提出したが、この地には海水浴客のためにベビーゴルフ場を設置するためと報じられている（横賀六・一三）。

また、高座郡茅ヶ崎町でも湘南地方遊覧客・海水浴避暑客を呼び込む一策として、新田信町長の提唱で、茅ヶ崎

駅裏の海岸から二町（約二二〇メートル）のところにある庭園地を利用して、ベビーゴルフ場を設置することになり、神奈川県都市計画課太田謙吉技師に設計を依頼し、具体案が出来たので近日着工する予定と報じられた。敷地は三〇〇坪、築山、泉水、池、四阿、ベンチ、飛石、藤棚などを配置した計画であった（横賀七・一七）。中郡大磯町でも西村という人物が、北本町の空き地一〇〇余坪をベビーゴルフ場として使用するとして申請（同）、八月には、一日から開業し避暑客のサービスに努めていると報じられている（横賀八・二）。

その他にも、川崎市では市内の直井勝蔵が、体育奨励と娯楽を兼ねて、省線川崎駅前のカフェー松葉屋裏に約二〇〇坪のベビーゴルフ場を設置し、開場には市長代理が始球式を行っている（横賀七・一二、七・二三）。

このように、県内各地に続々と造られていた。

新たな税源として

神奈川県では、同年二月、麻雀・ベビーゴルフ場・魚釣・射的・撞球などの遊技場の料金が不統一で共倒れとなるおそれもあるので、これらの遊技場の組合設立などを認める「遊技場取締規則」の改正を行った（横賀二・一二）。

一方、流行に伴って、ベビーゴルフ場から徴収する税額を上げていこうと

いう動きも出てきていた。

四月、政府は地方税などの整理をするために、税制整理準備委員会を設置した。六月の報道では、内務省案では、家屋税の国税化やいくつかの雑種税の減額・廃止などにより減少した分を、所得税付加税や新たな雑種税の新設により捻出するとし、新税目としてゴルフ税・野球観覧税と共に、遊戯場税としてダンスホール・マジッククラブ・ベビーゴルフ場が対象として挙がっていた（中外商業新報六・二一、国民新聞六・二五）。

神奈川県では、「最近プチ・ブル階級の娯楽機関としてベビー・ゴルフが猛烈なる勢ひで流行し県下各所に続々としてベビー・ゴルフ場が新設されるので、鵜の目鷹の目で税源を物色している県では、早くもこれに課税することにした。しかし、現行では、ベビーゴルフ場はその他の遊技場にあたり、広狭にかかわらず月税二円六〇銭のみなので、県会を待たず参事会において雑種税にベビーゴルフ税を新設し、三〇坪以下五円、三〇坪以上は一〇坪を増加する毎に一円を増加する案を検討中であると報じられている（横賀六・一六）。これに対し「営業者はビツクリ」して、先述の横須賀市議新野勇吉を中心として場主が集まり組合を結成し、「新税反対に猛進する筈」と報じられた（横賀六・二〇）。このように、ベビーゴルフ場は組合を結成するまでになっていた。その後の参事会にお

る議論は分からないが、同年一〇月の課目課額告示には、ベビーゴルフは入っていない（『神奈川県公報』五一四、三一年一〇月二七日）。

東京府でも同年十一月、ベビーゴルフ税が野球観覧税・タンク税と共に、新税としてあげられている（読売一一・二〇）。

ところで、神奈川県では、税とは直接関わりはないが、次のような話もある。県知事山縣治郎は「外人関係に対する社交振りは満点で在浜外人から非常なる好感を以て迎へられてゐる」が、このたび「外人向きの娯楽機関として目下流行しつゝ、ある」ベビーゴルフ場を紅葉ヶ丘官邸の庭に造ることにし、県営繕課に命じ、設計図が出来上がったので着工する予定であると報じられている。同ベビーゴルフ場は約四〇五〇〇坪で、サザンカやツツジを植えて、土橋、鳥居、燈籠を点在させた「モダン」な計画であったという（横賀四・一〇）。山縣治郎は、一九二九（昭和四）年七月から三二（昭和七）年一月まで県知事を務め、湘南遊歩道建設などにより外国人観光客の誘致を行っていた。

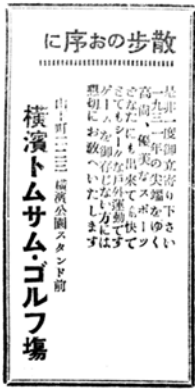
関内のベビーゴルフ場

横浜市では、二月、関内地区にベビーゴルフ場ができ、新聞に広告を掲載している。神奈川県内では、早い時期のベビーゴルフ場である。

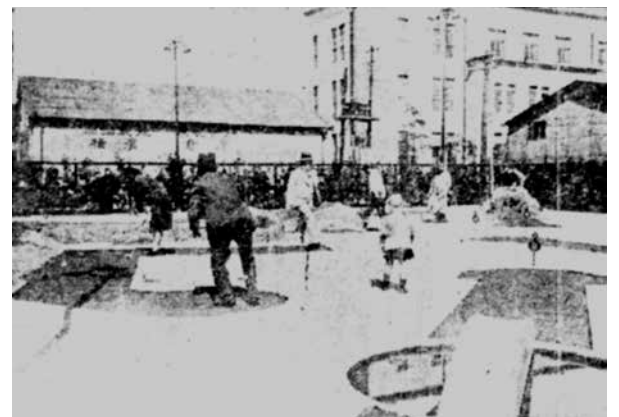
このコースは、横浜インターナシヨ

ナルミニチュアゴルフコースという名前で、ブレイキという人物が約八〇〇〇円を投じて、設計を戸野琢磨事務所（横買二・八）に依頼し山下町五三に開設した（横買二・八）。戸野は早稲田大で教鞭をとる一方、二四（大正一三）年に日本で最初となる造園建築設計事務所を開設していた（金井格一九八五）。この「尖端に立つユニークな／ミニチュアゴルフコース」は約三〇〇坪の面積をもち、「東洋一の広さと設備の完全を誇る優雅高尚にして興味深い」一八ホール、午前九時から日没まで開場し、一ゲームは約二〇分、料金は第一ラウンドでは一人五〇銭、第二では四〇銭、見学のみの入場料は二〇銭であった。

次に確認できるベビーゴルフ場は四月になる。四月二日には、横浜公園スタンド前、山下町二二三「横浜トムサム・ゴルフ場」の広告が掲載され、「尖端に立つユニークなミニチュアゴルフコース」の広告が掲載され、「東洋一の広さと設備の完全を誇る優雅高尚にして興味深い一八ホール」を市目抜の深い十八ホールゴルフコースに今日から開設しました。是非お試し下さい。



横浜トムサム・ゴルフ場の広告（『横浜貿易新報』4月2日）



横浜トムサム・ゴルフ場（『横浜貿易新報』4月5日）

歩のお序に／是非一度御立寄り下さい／一九三一年の尖端をゆく／高尚、優美なスポーツ／どなたにも出来て愉快で／とてもシークな戸外運動です／ゲームを御存じない方には／懇切にお教へいたします」と載せている。同日の記事では「ニューヨークあたりのと同様本格的で規模も大きく一般ゴルフ愛好家から歓迎されてゐるのみならず愉快な高尚なスポーツとして婦人間にも評判」と書いてある（横買四・二二）。五日にも、「次から次へと出来るベビー・ゴルフ場に超比例してゴルフの大衆化はすばらしい勢ひ」で賑わいは大変なものとなっており、「三百余坪十八コースの大規模で」、「ドライブの距離がないだけでゴルフの真味に欠ける所がない」として、「紳士淑女学生小供」だけでなく「横浜の球界の元老さ

ん連」も大勢やってきて、「小岩井御大がレコードを作つて鼻高々の由」と報じられてゐる（横買四・五）。

横浜のベビーゴルフ場

名前	所在地	経営者
サロンベビーゴルフ	山下町136	久松國次郎
横浜万国ミニチュアゴルフ	山下町53	D.H.ブレイキ
横浜トムサムゴルフ	山下町223-1	山口栄
桜木ベビーゴルフ場	桜木町1-1	杉田武造

出典：ベビーゴルフ研究会編『ベビーゴルフの遊び方』（いづみや書店）1931年。

表にあるように山下町二二三―一、五三の他に、山下町一三六に「サロンベビーゴルフ」、桜木町一―一に「桜木ベビーゴルフ場」があった。山下町は震災復興が遅かったため、適地が多かったであろう。

神奈川県選手権大会

このベビーゴルフの流行は、「1931年のモダン紳士淑女の間に百パーセントの魅力を持たれて来た」（横買七・二四）と言われるまでとなり、人氣に乗じて、全国各地で選手権大会が開催されるまでになった。神奈川県最初の大会は、次の要領で開催されると報じられた（同）。場所は、山下町二二三の横浜トムサム・ゴルフ場、七月二五日から八月七日ま

でに参加権者を決定し、その後、選手権大会を開催する。参加権は、男子は一八コースを打撃数七〇点以下の者を高得点者から順に三二名、女子は同様に打撃数八〇点以下から決めるとし、この第一回の優勝者には、横浜貿易新報社提供の優勝杯が、高得点者には賞牌が贈られることになっていた。その後、このコースでは参加権を狙ってベビーゴルフをプレーする者が増えたという。また、「そのスマートネスが1931年型の女性の気持にピッタリ来るのか」女性ファンが多くなったという（横買八・五）。

この選手権大会は一日に行われたようである。同日の記事では、午後六時から行われ、出場者は一二日までに四六〜五九点の三二名であると報じている（横買八・一五）。

一〇月には、第二回選手権大会の予告が報じられている（横買一〇・二二）。第二回も前回同様に、会場は横浜トムサム・ゴルフ場で、二日から予選が行われ、一〇月一日に選手権大会が予定されていた。優勝者には、これも前回と同様に横浜貿易新報社提供による「貿易トロフィ」、賞牌が贈られる予定となっていた。今回の「トロフィ」は、写真に見るようにゴルフボールとゴルフクラブをかたどったものとなった（横買一〇・一五）。この第二回大会は、天候不順によって、開催予定の一五日から順延となり、二二日に開催された。出場選手は全三〇名で、三回



「貿易トロファイ」
（『横浜貿易新報』10月15日）

婦人学生二十五銭」とあり（横賀七・二四）、一回の料金は一〇銭、「婦人学生」は五銭の値

下げであった。

その他に同月には、川崎ベビーゴルフ場でも、「奇抜な興味深いコースに改築し場内を刷新」したので来遊を待っているという記事が掲載されている（横賀三二・三・二七）。

戦ベスト・エイトからの結果が判明する。これによると、ベスト・エイトには外国人二名を含めて、松井・大石・シルバー・ダーウィン・矢原・吉澤・半田・後藤の八人が進み、準決勝には松井・シルバー・矢原・半田が進んで、決勝では松井と半田が対戦し、半田が五六点と一点差により優勝している。半田は、第一回選手権大会の優勝者であった（横賀一〇・二四）。

その後のベビーゴルフ

選手権を開催した横浜トムサム・ゴルフ場は、冬季は休業し設備を整えていた（横賀三二・三・一一）。屋外で行うスポーツなので、冬の間はコースが閉じていたようである。翌一九三二（昭和七）年三月、「春はゴルフから」の意気込で「新装オープンをする」となったと報じられ、「更に大衆に迎合されるやうに」料金を値下げしている（同）。同日に掲載された広告を見ると、料金は一回三〇銭、「御婦人と学生」は二〇銭であった。先に見た記事には、「一回十八コースにて四〇銭、

三二年の春には、このようにオープンを告知する記事があった。しかし、これ以後、『横浜貿易新報』紙面では、ベビーゴルフについてはほとんど報道されなくなった。後年、このベビーゴルフの流行について、上原啓二は「数年の間は盛んであったが、飽きられて若干のコースは残ったが多くが無くなったと書き（上原啓二一九六九年）、また、『朝日新聞』三五（昭和一〇）年七月には、政争をベビーゴルフに例えて「いつまでも時代遅れの小ゲームに夢中になって」との岡本一平の風刺漫画が掲載されている（朝日三五・七・二五）。三五年頃には、すっかり流行は去っていったようである。その後の横浜のベビーゴルフ場の行く末を、簡単に見ておこう。花月園では、昭和一〇年代発行とされている「花月園案内図」には、三一

（昭和六）年と同様に「ゴルフ」場が描かれているが、三六（昭和一一）年以降とされている「竹生島弁才天奉安所花月園案内図」には、同じ場所に「小猿山」とあり、ベビーゴルフ場はなくなっている。しかし、「ゴルフ場は戦後、花月園競輪場となっても存在していた」（斎藤美枝二〇〇七年、三〇五頁）との記述もあり、何らかの形で続いていたようである。関内地区のベビーゴルフ場については、昭和初期の火災保険図により土地の様子を見てみよう。

一九三八（昭和一三）年「関内方面No11」を見ると、「横浜トムサム・ゴルフ場」の山下町二三三（正確には二三ノ一）には、建物は存在しない。この場所は、三〇年頃にはゴーバイ・ランジャ・リミテッドの所有とあり（『横浜市土地宝典 中区之部』）、関東震災によって神戸に移ったインド系貿易商の所有であった。同社は神戸市磯上通にあり（『神戸市商工名鑑』昭和五年）、山下町二三三は、その後も空き地のままで、余り活用されていないようである。山下町五三三は、三〇（昭和五）年には空き地で、三八（昭和一一）年に鉄筋コンクリート造、五階建ての「ヘルムハウス」（火災保険図「関内方面No19」ではヘルムビル）が建設されている。一階にヘルム商会が入り、上部はアパートであった。山下町一三六は、現在の横濱媽祖廟

近辺にあたるが、三〇（昭和五）年「関内方面No13」では、神奈川モーター商会の工場等が建てられており、どのようにベビーゴルフ場が造られていたかはよく分からない。

桜木町一一一は、横浜市中心授産所（興産館）などがあった場所ので、三〇年「戸部方面追加A」では、一一一九に空き地があるので、そこに開設されていた可能性が高いが不明である。一九三一年、全国的に族生したベビーゴルフ場は、流行が去った後にも、若干は残っていたものもあるが、多くは消えていった。

【参考文献】

- 西村貫一「趣味のベビーゴルフ」（文友社）一九三一年、下羽寅吉「ベビー（小型）ゴルフ」（日本小型ゴルフ商会）一九三一年、ベビーゴルフ研究会編「ベビーゴルフの遊び方」（いづみや書店）一九三二年、「商店界」編輯部「ベビーゴルフ場の経営法」（「商店界」第一巻第八号）一九三一年八月、上原啓二「庭園入門講座第五巻」（加島書店）一九六九年、斎藤美枝「鶴見花月園秘話」（鶴見区文化協会）二〇〇七年、金井格「名誉会員 戸野琢磨先生をしのぶ」（『造園雑誌』第四九巻第一号）一九八五年、読売新聞社横浜支局編「ランドマークが語る神奈川の100年」（有隣堂）二〇〇一年、伊藤泉美「一九三〇年代後半の横浜中華街とその周辺」（『横浜開港資料館紀要』二九）二〇〇一年、「朝日新聞」は聞蔵Ⅱビジュアル、「読売新聞」はヨミダス歴史館、「大阪朝日新聞」・「国民新聞」・「中外商業新報」は神戸大附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」による。※新聞名は略称、年月日のうち、昭和六年の記事は年を省略した。